



唯物弁証法の一般的法則の妥当範囲

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2012-11-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山本, 嘉太郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00001271

唯物弁証法の一般的法則の妥当範囲

山 本 嘉 太 郎

北海道教育大学旭川分校哲学研究室

Katarô YAMAMOTO : An Adequate Sphere of General Principles Concerning Materialistic Dialectic.

周知の通りにヘーゲルは弁証法という術語に従来のそれとは異なる新しい概念を与えた。すなわちヘーゲルはこの宇宙のすべての事物はアンジッヒ、フュールジッヒ、アンウントフュージッヒの三段階の累進的の反復を通して無限に発展していくものと考え、この発展の理法を弁証法と名付けた。宇宙を静止した不動のものとは見ずに、それを不断の発展の途上にあるものと考えたことはヘーゲルの偉大な思想であった。このことは次ぎのような事実から見ても明らかなことである。ヘーゲルはすでに十九世紀の初めから宇宙の根源はイデーであり、このイデーが弁証法的に発展して宇宙の無生物や生物や人間や精神を顕現するのだと考えた。人間が地球有機体の限り無い発展の結果として出現したのだという思想をダーヴィンが生物進化論を確立する半世紀も前にすでに着想していた。ただしかしヘーゲルが宇宙の根源を神秘不可思議な絶体者としてのイデーというような観念的なものと考え、宇宙のすべての事物をその体現したものと考えたことは誤りであった。現在の諸科学から考えて宇宙の万物はイデーが体現したものではなかったのである。

汎神論とも呼ばれる観念論の立場に立つヘーゲルに依って発見された弁証法を唯物論の立場から論究したのはマルクスとエンゲルスとであった。エンゲルスはその未完成の「弁証法と自然」の中でこう述べている。「自然の歴史と人間社会の歴史から、弁証法の諸法則は抽象されるのである。しかしこの諸法則は歴史的発展のこれら二つの局面と思惟そのものともっとも一般的な法則にはかならない。しかもこの諸法則は、その主要点にしたがって次の三つの法則に帰着される。量から質への転化とその逆の法則、諸対立物の浸透の法則、否定の否定の法則。この三法則のすべてはヘーゲルによって、かれの観念論的な仕方、たんなる思惟法則として展開されている。すなわち第一の法則は論理学の第一編存在論のなかに、第二の法則はかれの論理学のうちのもっとも重要な部分たる第二篇、すなわち本質論を占めており、最後に第三の法則は、全体系の建設のための根本法則の役割を演じている。」この「量の質への転化およびその逆の法則」と「諸対立物の浸透の法則」と「否定の否定の法則」とはエンゲルスに依って初めて弁証法の諸法則として考えられるようになった。その後これらの三法則は唯物弁証法に於いては自然の領域と人間社会の領域と思惟の領域との各領域に共通に支配するところの弁証法の一般的諸法則と呼ばれて研究されてきた。エンゲルスの時にはこの三法則は「弁証法と自然」や「反デュリング論」などの中で説明はされていたが、まだ余り詳しくは説明されていなかった。それに論証のために引用された諸科学も十九世紀の段階のものであったから、その論証は不十分に終ったり、誤りに落ち

入ったりしたところもあった。しかしこの唯物弁証法は二十世紀のレーニンの時代にはいり、次第に多くの人たちに依って研究されるようになり、その論証に引用される諸科学も発達していった。この時代には「対立物の統一の法則」と「量の質への転化およびその逆の法則」と「否定の否定の法則」との三法則として論究されていた。法則の名称が一部分変わったところもあったが、その思想はエンゲルスの思想を受け継ぎ発展させ、論証が精密になっただけであった。たとえばこのレーニン段階に於いて出版された日本の岩波哲学小辞典には次ぎのように書いてある。まず対立物の統一の法則については次ぎのように説明している。「自然（社会を含めて）のすべての事物、過程には矛盾対立し相互に排除（斗争）し合う契機が内在するが、之等は相互に制約し、相互の規定中に滲透し合う。之がそれ等の統一、併し統一は一時的、条件つき、斗争は絶対的であり、事物発展の内的動力をなす。故に統一は動的で一定段階に於いて破れ、新たな対立と統一とが発生する。従って事物を対立物の統一として捉えることが認識の法則であり、之によって運動の原因をその過程の外に求むる考えが排除され、事物の自己運動、飛躍等が理解される。」それから「量の質への転化」の法則については次ぎのように説明している。「自然（社会を含めて）のすべての事物はそれぞれに固有な内的な規定性としての客観的な質を有し、之は事物の量的規定との不可分な統一に於いてあるが、量の変化は或程度迄質に無関係、併し連続的な量的変化は漸次に質の変化を準備し、一定段階に達すると漸次性が中断されて飛躍的に新たな質を発生せしめる」。それから「否定の否定」の法則については次ぎのように説明している。「一定の事物がそれに固有な内的矛盾の展開によって他物に転化することは前者の否定であるが、之は絶滅ではなくて前者中の積極的なものを保存する。後者はその発展過程に於いて、再び否定されて第三の物に転化するが、最初の物の或特徴が高き段階に於いて反復されて、一見旧への復帰の感を呈する。これが否定の否定。これは所与の事物の発展の諸段階の全聯結を示すものとして、自然、社会、思惟の発展の重要法則とされている。」

このレーニン段階に於ける唯物弁証法の一般的諸法則は1939年の頃まで各国で普及していた。1939年にスターリンは「弁証法的唯物論と史的唯物論」という論文を書いて弁証法的唯物論または唯物弁証法を新しい立場から考察した。この論文が書かれた頃は第二次世界大戦が起って各国がさわがしくなってきたためにその論文がしばらく各国の学界に知られずにいた。第二次世界大戦が終ってからこの論文は各国へ伝えられ、日本へも輸入されて翻訳された。この論文では「マルクス主義の哲学的唯物論は次ぎの基本的特徴に依って特徴づけられる」として次ぎの三つの特徴が考えられている。(a) 世界を絶対理念、世界精神、意識の具現と見なす観念論とは反対にマルクスの哲学的唯物論は次ぎのことから出発する。すなわち世界はその本性に於いて物質的であり、世界に於ける多種多様の現象は運動する物質の種々の形態であり、弁証法的方法に依って確定される現象の相互連関と相互被制約制とは運動する物質の発展の合法性を現わす。世界は物質の運動法則にしたがって発展し、世界精神などを少しも必要としない、ということから出発する。(以下略)(b) 現実に存在するのは我々の意識だけであって物質世界、存在、自然は我々の意識の中にだけ、我々の感覚、表象、概念の中にだけ存在すると主張する観念論とは反対にマルクス主義の哲学的唯物論は次ぎのことから出発する。すなわち物質、自然、存在は意識の外にそれとは独立に存在する客観的實在であり、物質は感覚、表象、意識の源泉であるから物質こそ第一次的であり、意識は物質の反映であり、存在の反映であるから第二次的であり、派生的であり思惟はその発展に於いて高い完成度に達した物質の所産、すなわち頭脳の所産であり、その頭脳は思惟の器官であること、だから大きな誤りをおかすまいと欲するならば思惟を物質から切り離

してはならないということから出発する（以下略）。（c）世界とその合法則性を認識する可能性を論駁し、我々の知識が信頼できることを信ぜず、客観的真理を認めず、そして世界は科学に依っては決して認識しえない物自体でみだされていると見なす観念論とは反対にマルクス主義の哲学的唯物論は次ぎのことから出発する。すなわち世界とその合法則性とは完全に認識可能なものであり、経験と実践とに依って確証された自然法則性に関する我々の知識は客観的真理の意義をもつ信頼できる知識であり、世界には認識不可能なものはなく、在るものはただ科学と実践との力に依ってあばき出され、認識されるであろう、まだ認識されていないものだけであるということから出発する。」（以下略）

またこの論文は「マルクス主義の弁証法的方法は次ぎの基本的特徴に依って特徴づけられる」といって次ぎのことを述べている。（a）形而上学とは反対に弁証法は自然をたがいに切り離されたがいに孤立し、たがいに独立したものや現象の偶然的な集積とは見なさずに物や現象がたがいに有機的に関連し、たがいに依存し、たがいに制約する連関した統一のある全体と見る。（以下略）（b）形而上学とは反対に弁証法は自然を静止、不動、停滞と不変の状態とは見ずに不断の運動と変化、不断の更新と発展の状態と見るのであって、そこでは常に或る物が発生し発展しており、常に或る物が崩壊し、自己の生命を終りつつある。だから弁証法的方法は現象がその相互の連関や被制約制の見地からだけでなくその運動、その変化、その発展の見地から、その発生と死滅という見地から観察されることを要求する。（以下略）（c）形而上学とは反対に弁証法は発展過程を量的変化が質的变化に導かない単純な生長過程とは見ずに些細なかくれた質的变化から明白な変化に根本的变化に、質的变化に移行するような発展、すなわち質的变化が漸次的ではなく、急速に突然に或る状態から他の状態への飛躍的形態で起るような発展、質的变化が偶然ではなく合法則的に起り、目に見えない漸次的な量的変化の集積の結果起るような発展と見る。（以下略）（d）形而上学とは反対に弁証法は自然物と自然現象とには内的矛盾が本来付き物であるということから出発している。何故ならそれらすべてはその否定的な面と肯定的な面をもち、その過去と未来とをもち、その生命を終りつつあるものと発展しつつあるものをもっているからであり、それらの対立物間の斗争、古いものと新しいものとの間の斗争、死滅していくものと生まれ出るものとの間の斗争、生命を終りつつあるものと発展しつつあるものとの間の斗争が発展過程の内的内容、量的内容、量的変化の質的变化への転化の内的内容をなすものであるということから出発している。（以下略）註

上のマルクス主義の哲学的唯物論の特徴を記述した諸命題は現代の唯物論の思想体系を正確に要約し表現している。特にマルクス主義の弁証法的方法の特徴を記述した諸命題は新しい立場から見た唯物弁証法の一般的諸法則に当るものであると考えられる。スターリンが考えた上記の諸命題を中核として、これを説明敷衍する文章を展開すれば、そこに自然に弁証法的唯物論の思想体系が成立するのであった。それでこのスターリンの論文が公にされてからは、各国で出版される弁証法的唯物論の思想書はおしなべて上述の諸命題を中核にして叙述されてきた。この学風は1932年に第二十回共産党大会に於いてスターリン批判がおこなわれるまで続いた。ところがこの第二十回共産党大会でスターリンの政治の仕方が批判され、政界で失脚すると同時にかれの思想体系も全面的に否定され、抹殺されるようになった。この時以来スターリンの弁証法的唯物論の思想を引用して弁証法的唯物論を論ずる者が急にいなくなつた。この時以来弁証法的唯物論者たちはこの弁証法的唯物論を研究する場合はふたたびマルクスエンゲルスやレーニンの段階へかえてこれを研究するようになった。このような学界の傾向の中で1958年にソビエトの科学院哲学

研究所から「マルクス主義の哲学の基礎」が著わされた。この著書は日本に於いて森孝一や寺沢恆信に依って翻訳され、「哲学教程」として出版された。この「哲学教程」は最新の弁証法的唯物論の思想のもっとも新しい代表的体系であると考えられる。この「哲学教程」の中には弁証法の一般的諸法則として、「量的変化の質的变化への移行の法則」と「対立物の統一と斗争との法則」と「否定の否定の法則」との三法則を挙げ、これらについて、詳しい論証的説明を加えている。これらの三法則の論証的説明のうち、まず第一の「量的変化の質的变化への移行の法則」の論証的説明について見る。この法則の論証的説明は現代の諸科学の知識から見て別に目立つ誤りはないようである。

次に「対立物の統一と斗争との法則」について見る。この法則は十九世紀に於いてエンゲルスが「対立物の相互浸透の法則」と呼んで考えたものを発展させたものである。ここで対立物とは相互に対立し矛盾するものことである。「哲学教程」でも「マルクス主義の弁証法はすべての対象および現象には、内的矛盾が本来付き物であるということから出発する」といい、さらに「何故ならそれらすべては否定的な面と肯定的な面を持ち、その過去と未来とを持ち、その生命を終わりつつあるものと発展しつつあるものを持っているからであり、それらの対立物間の斗争、古いものと新しいものとの間の斗争、死滅していくものと生まれ出てくるものとの間の斗争、生命を終わりつつあるものと発展しつつあるものとの間の斗争が発展過程の内的内容、量的変化の質的發展への転化の内的内容をなすものであるということから出発する。」と説明している。現代の弁証法的唯物論は、このような対立物の統一と斗争とを通してすべての事物は発展すると考える。しかしすべての事物はこのような対立物の統一と斗争とを通して発展するであろうか。たしかに「数学では+と-、微分と積分、力学では作用と反作用、物理学では陽電気と陰電気、化学では原子の化合と分解、社会科学では階級斗争といわれるように多くの事物は対立物つまり内的矛盾を含んでいる。ところがまた多くの事物の中にはこのような対立物というべきものを含まないものもある。そこには内的矛盾というべきものがはっきりとは見出しにくいものもある。その発展がこのような対立物の統一と斗争とを通過していかなる形態でもおこなわれると考えられないものもある。たとえば二重水素と三重水素とは水素爆弾では $D + {}^3H = {}^4He + n + 17.6MeV$ という反応を起してヘリウムへ融合する。しかしこの場合二重水素と三重水素は果して対立物だといえるだろうか。無生物から生物への発展、霊長類からの人類への発展、その他多くの事物の発展がどのような対立物の統一と斗争とを通過して起こるのかまだ知ることができない。自然や社会や思惟の歴史的現実の中には対立物の統一と斗争とを通過しての発展と考えられる現実も多くあるが、またかかる事実として考えにくい発展もしばしばある。このことは対立物の統一と斗争との法則が正しく支配している現実が多くあるとともに、この法則に支配されない現実も多くあるということにほかならない。

次に「否定の否定の法則」について見る。「哲学教程」にはこの「否定の否定の法則」の本質を定式化して次のように書いている。「否定の否定の法則」とはその作用に依って否定されるものと否定するものとの間の連関、継承性が条件づけられ、それに依って弁証法的否定がそれ以前のすべての発展を投げすて不毛な無駄な否定としてではなく、先行する諸段階のすべての積極的なものを自分の中に維持し保存し、より高い基礎の上で経過してきた諸段階の何等かの諸特徴を繰り返して全体として前進的な進歩的な性格をもつ発展の条件として現われるところの法則である。」そうしてエンゲルスは否定の否定ということを次のような例で説明している。ここに一粒の麦がある。これを大地に植えるとやがて発芽して茎となり葉をつける。これが麦粒の否定

であり第一の否定である。その麦の茎と葉とは更に生長して花が咲き実を結んで新しい麦粒がこぼれ落ちる。これが茎や葉の否定であり、第二の否定つまり否定の否定である。例えば否定の否定の法則はこういう一粒の麦が生長し結実して多くの麦粒になる過程に現われているというのである。この「否定の否定の法則」はエンゲルスがヘーゲルの観念弁証法に基づき、自然と社会と思惟のすべての領域に支配している法則として考えようとしたものである。そうして現代まで弁証法的唯物論に於いて重要視されている法則である。

たしかに現代の諸科学から見て自然や人間社会や思惟の諸領域には否定の否定という過程を通して発展する事物が多い。特に植物や人間社会や人間の思惟または知識の諸領域にはこのような典型的な事物が見出される。例えば種子の植物の結実や増殖や人間社会の歴史や諸科学の知識の歴史に於いてその事実が見られるように。しかし無生物や生物の領域に於いてはこの「否定の否定の法則」に無関係な事物の発展が多く見出される。特にその種類が多く、質量的にも時間空間的にも無限で、龐大な無生物の領域にこのような事物が多く見出される。例えば或る条件の中でおこなわれる諸元素の化合や混合は斗争とか否定と考えられるような過程を通らないで、極めて静かに調和的におこなわれている。動物の領域に於いても例えば古い世代から新しい世代が生成する場合、父と母とから出る細胞が極めて静かに調和的に合体して子供が生成する。動物や人間の個体発生や系統発生過程を見ても別に「否定の否定の法則」と考えるべきものは働いていないようである。「哲学教程」にはこういっている。「三位一体のあらゆる過程に結びつけなければならない何かアプリオリな図式と見なすのは正しくないであろう。何等かの対象の発展は必ずしも三つの段階ではなくそれはより多くのまたは少い段階を経過することはありうるし、またしばしば経過しているのである。或る過程では新しいより高い基礎の上で最初の形態への復帰が観察されるが、ほかの過程ではこのことは余りはっきりとは生ぜず、単に部分的に生ずるに過ぎない。」このように否定の否定あるいはトリアダの各段階を正式に経過しないところの、もしくはそれを省略したり複雑化したりしたところの、多くの事物の発展の仕方があるといっても、それで「否定の否定の法則」が働かない上のような多くの事物の発展の仕方が厳存することを否定することはできない。

ヘーゲルは観念論の立場に立って宇宙の根源者は観念的な絶対的なイデーであり、このイデーが弁証法的に発展して自然を体現し精神を体現し、さらに主観的精神や客観的精神や絶対的精神を体現すると考えた。つまり弁証法の発展は無限の発展であると考えた。弁証法的唯物論もこの弁証法的発展は無限であるという考えを受け継いで、宇宙の根源は物質であり、自然や社会や精神はその弁証法的発展の諸形態にほかならない。その弁証法的発展は無限であると考えた。この宇宙の中の事物は永久に弁証法的な発展を続けていくと考える。つまりこの宇宙の中の事物の運動を単に発展の過程に於いて捉えるのである。かってエンゲルスはいった。「全自然は最小のものから最大のものに至るまで、砂粒から太陽に至るまで原生物から人類に至るまですべて永遠の生成と消滅絶え間無い流転、休み無き運動と変化の中に存在する。」

エンゲルスは続いていっている。「それ故に弁証法は、事物とその概念的模写とを本質的にそれらの連関、連鎖、運動、生成と消滅に於いて捉える。」また「哲学教程」でもこう述べている。「運動の前進性は複雑な過程であってこれを不当に単純化して理解してはいけぬ。地球上に於ける自然または社会の前進的発展は大量のたがいに交代する形態現象の中で実現される。そしてこれらのもののおのおののももちろん暫次的なものである。たとえていえば動植物の同一の種が絶えず上向線をたどって発展しているという風な事態になっているのではない。全体としての有機

界は前進的に発展しているのであるが、個々の種は或いは発生し、或いは消滅し、或る種のもは他の種へ転化するのである。変化する諸条件に適応する或る有機形態の能力は他の形態の適応無能力、そしてその結果としてのこの形態の死滅と組み合わせられている。社会生活では或る構成体とその社会秩序とは他の構成体と秩序とに依って交代され、その生涯を終える。弁証法的否定の本質そのものに依って個々の対象の上向的発展はそれらの対象の下降的発展に依って合法的に交代されるのである。何故ならば自己本来の発展に依って対象は自己の否定の条件を準備しているのだからである。或るものの生長発展はその対立物として他のものの老衰死滅を伴っているのである。」このように弁証法的唯物論は事物の運動が発生発展の過程と共に衰退滅亡の過程をもつことは一応指示してはいる。しかしこの弁証法的唯物論はそのことを指示するだけで、発生発展の過程は詳細に論証説明するが、衰退滅亡の過程はそうしない。マルクスは「資本論」を書いて資本主義の運命を論じたことにはある。しかし弁証法的唯物論は全体として事物の衰退滅亡の過程を論証説明することはまれである。人間にとっては発生発展の過程はたしかに価値があり、好ましいことである。しかしそれだからといって運動の不可避的なもうひとつの過程である衰退滅亡の過程を論証説明しないことは学問的ではない。学問が完全な知識であることをめざすべきものである限り、好むと好まざるとにかかわらず運動の全過程を明らかにしなければならない。「哲学教程」は事物の発生発展過程を論証し説明しようとして次ぎのように書いている。「発展の前進的性格についての弁証法の命題に反対してブルジョワ哲学者たちはわれわれの惑星地球は永久に生命をもたないであろう。そして進歩はここに於いては無限でありえないであろうと議論するのはまともをはずれている。物質のあらゆる個々の存在形態と同じようにその上に物質の分化にとってそして思考する人間にまで至る生命ある存在物の出現にとって好都合な諸条件が生まれた惑星はうたがひも無く暫時的なもので永久的なものではない。しかし個々の惑星がそこに発展した豊富な物質の諸形態のすべてと共に有限なものであり、死んでいくにしても物質とその運動の諸法則は死んでしまうことはできず、したがって物質が分化する能力、どこかほかの場所で、他の惑星上で生命の最高の現われをも含めて、あらゆる多様なその諸形態を再現する。その能力も死んでしまうことはできない。」さらに「哲学教程」はエンゲルスが「弁証法と自然」の中でこういったことを引用している。「物質は、それが地球上に最高の精華、思考する精神をいつかは絶滅するであろうそのおなじ鉄の必然性をもって、この思考する精神をふたたびいずれかの場所、いずれかの時期に、うみださなければならない。」

このように地球およびその上の人間が今までのように未来も永久に発展し続けることはなく、太陽系したがって地球もその上の人間もいつかは衰退滅亡するであろうと考えることは現状の諸科学の成果から見て正しい。太陽も諸惑星もその上の生物もいつかは衰退滅亡する運命にある。しかし物質の発展は無限であり、地球と共に人間は滅亡してもいずれかの場所いずれかの時期に人間以上の思考する生命体を生み出さなければならないと考えることはできない。地球上の人間の科学技術が未来にどんなに発展してもはるか彼方の宇宙空間に浮かんでいるであろう他の惑星へ人間は飛んでゆくことはできない。また宇宙空間のどこかに人間以上の生命体を出現させるような天体が存在するという証拠はどこにもない。だから宇宙空間のどこかにいつか忽然として人間以上の生命体が出現するだろうと考えることは単なる空想である。

現代の諸科学なかんずく天文学にしたがえばこの宇宙は速度距離関係の法則にしたがって休み無く膨脹している。遠い未来には各星雲間の距離ははるかにへだたって、各星雲から他の星雲が見えなくなるかも知れない。各星雲に含まれている無数の星だって永久不滅のものではない。い

つかは滅亡する運命にある。またこの宇宙は極度に膨脹したのち収縮に転じて、一塊の物質のかたまりになるのかも知れないとも考えられている。いずれにしてもこの宇宙全体が滅亡の運命にあると考えられている。滅亡した廃墟の中から新しい宇宙が発展し始めるのかも知れない。とにかく現在の宇宙は極度に進化発展ののち衰退滅亡するもののように考えられている。こういう諸科学の知識から見て物質の永久無限の発展を考えることは無理である。

通例どの学派に属する学派の始祖の思想または知識は完全で誤りの無いものとして考える傾向がある。弁証法的唯物論の立場に立つ人たちもややもするとマルクスやエンゲルスの思想はすべて完全で正しいものであると考える傾向がある。しかしかれらの思想も学問の思想である限り、つねに批判的に考えられなければならない。社会や学問の進歩発展の中にあって批判されて、真理として確認される思想だけが生き残っていかなければならない。学派の始祖の思想だからというので、それが社会や学問の進歩発展と無関係に、無批判的に無条件的に正しいものとして肯定されるようなことがあれば、その思想は宗教の開祖のドグマと同じものになる。マルクスやエンゲルスの思想は十九世紀の諸科学を背景にして形成されたものであることを忘れてはならない。弁証法の一般的諸法則もこの十九世紀の諸科学の段階に於いて考えられたものであることを忘れてはならない。エンゲルスが弁証法の一般的諸法則の論証のために引用する諸科学の知識が誤りであることがあるのはその知識が十九世紀の諸科学に基づいているからである。その思想を何か超人間的な絶対的な人間の思想として信仰して、無批判的に説明したり敷衍したりしようとする上上の物質の無限の発展を力説してしまうような思想に落ち入るのである。

さて上に述べたように、弁証法的唯物論が考えている弁証法の一般的諸法則について批判研究して見ると、宇宙の中にはそれらがたしかに働いている多くの事物の発展もあるが、それらが働いていないところの多くの事物の発展もある。これらの諸法則は自然や社会や思惟の各領域のすべての事物の運動には無関係であること、そこにはこれらの諸法則が支配しない多くの事物の運動があることが分った。この事実はこれらの諸法則が弁証法の一般的諸法則といわれるけれども実は宇宙のあらゆる事物の運動の全過程にくまなく働くものではなくて、その若干の事物の運動に働くものであることを示している。そうしてこれらの諸法則は宇宙の中の事物の運動の過程のうちその事物の発生発展の過程の諸法則であって、その事物の衰退滅亡の諸法則ではないことを示している。したがってこれらの諸法則は一般的諸法則ではなくて、単に若干の事物の発展の諸法則である。弁証法の一般的諸法則ではなくて弁証法的発展の諸法則である。しかしこれらの諸法則は弁証法的発展の諸法則としてそれらの働く領域が限定されたからといって決してそれらの価値を失い去ったわけではない。かってニュートンに依って確立された古典力学の上に立つ万有引力の法則はアインシュタインの確立した相対性理論に基づく万有引力論の中に依然として生き続けている。ただニュートンの確立した万有引力の法則は隋性系の世界に働く法則として限定されただけである。このように弁証法的発展の法則も、それらが真理である限り、若干の事物の発展の法則として生き続けなければならないのである。

註 中城竜雄訳「スターリン哲学論文集」(95p~104p)。